氏　　名	：	重　　歩美
専攻分野の名称	：	博士（教育学）
学 位 記 番 号	：	博甲第 262 号
学位授与年月日	：	平成２８年３月１５日
学位授与の要件	：	学位規則第４条第１項該当　課程博士
学 位 論 文 名	：	高校教育現場における長期欠席、中退、原級留置についての調査研究 ―全日制普通科教育困難校でのスクールソーシャルワーカーの立場から―
論文審査委員	：	（主査）　教授　保坂　亨 （副査）　教授　佐野　秀樹　　教授　貞廣　斎子 教授　佐藤　宗子　　教授　犬塚　文雄

学 位 論 文 要 旨

高校生の進路変更者は一定割合を推移し、あとを絶たない。高校現場の状況に対する問題意識として、高校教育には「完成教育」と「準備教育」、「平等主義」と「能力主義」、「義務教育」と「非義務教育」という矛盾した視点が混在している（志水 2002）ことに注目し本論を進めた。最初にこれらの矛盾が生まれた歴史を振り返ると、高校は進学希望者増加に伴い入学試験を設け序列化され、入試偏差値の低い高校は意欲の低い生徒が集まる教育困難校となった。次に、数学教科書の内容に注目したところ、大学への接続のために難易度の高い問題を載せた教科書の一方で、易しい内容の教科書が出版され、個々の生徒の学力に合わせ内容が二極化してきていた。最後に中退への対策を練るためには、その前に起こりうる長期欠席や原級留置、中退はしないものの他校へ籍を移す転学など、複雑にからみあった事象の経緯を分析する必要があると考え、文部科学省（2013）の最新データをもとに図 1 を作成した。また、生徒たちの中退理由と高校に進学した理由について、文部科学省および内閣府の調査を確認したところ、「もともと高校生活に熱意がない」など高校生活に気持ちが向かずに中退していく生徒やまわりに流されて進学した生徒の存在が確認できた。以上のような背景において、中退していく高校生は社会からこぼれおちていく可能性が高い。よって本論では、中退者の多い全日制普通科教育困難校に注目し、生徒たちが高校から排除されないために有効な全日制教育困難校の在り方を探ることを目的とした。

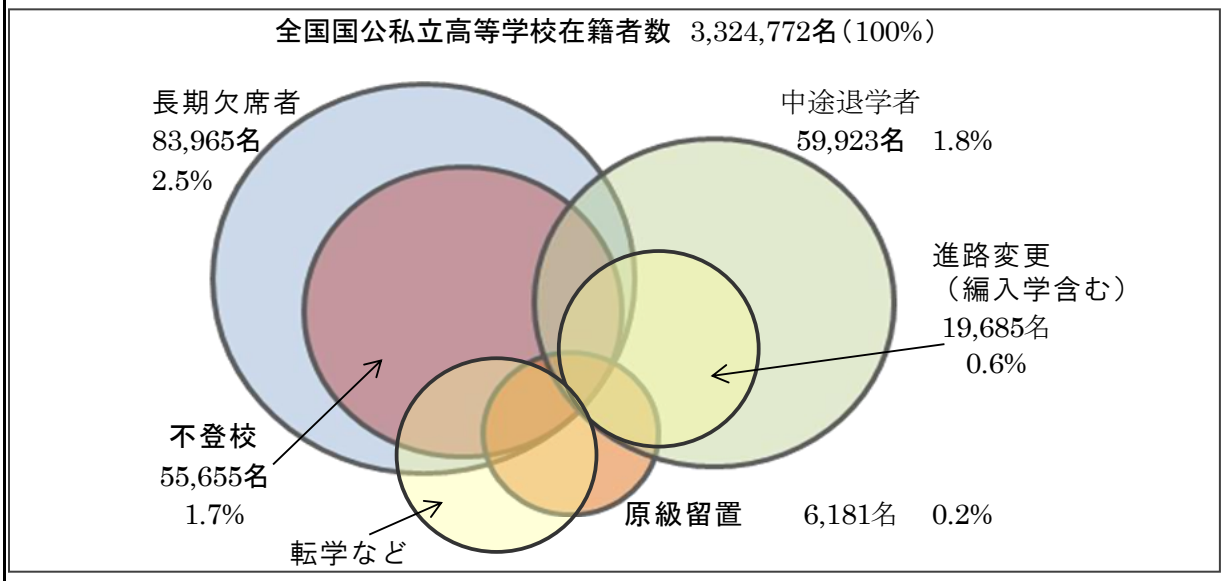

図１　2013 年度不登校、長期欠席、中途退学、原級留置等の関係

※文部科学省「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（2013）により筆者作成

4 つの調査研究を通して、高校生の長期欠席、中退、原級留置の実態について調査した。1 つ目は、文部科学省による長期欠席、中退調査を分析し、長期欠席調査では不登校だけでなく長期欠席全体、中退調査では転学も含めた「広義の中退」の実態を調査する必要性を明らかにした。2 つ目は、全国データと千葉県データを比較し、千葉県は長期に欠席しても学校に在籍し続ける傾向にあるが、長期欠席者や中退者は入試偏差値の低い高校に偏り、中退者は高校 1 年生に多いことを明らかにした。3 つ目は、千葉県で入試偏差値が 40 前後の 6 校で高校 1 年生のうち「広義の中退」をした計 110 名の在学当時の状況について、元担任教諭を対象にアンケート調査を行った。調査結果より半数以上は実の両親がそろっていない家庭で生活していたが、そのような背景を抱える生徒も一番の中退理由を「意欲不足」としていることから、高校教員は家庭環境などの事情に関係なく、生徒に学習意欲を求めていることを指摘した。4 つ目は、教職年数 20 年前後の経験豊富な現職教員を対象に、長期欠席、中退、原級留置への考え方についてたずね、そのうち最後の勤務校が教育困難校であった教員 4 名を対象に長期欠席、中退、原級留置の生徒を 1 名ずつ挙げてもらい当時の状況について面接調査を行った。その結果、千葉県の高校の傾向としてできるだけケアをして進級させる流れがあるものの「学習意欲」を求める高校教員の考え方がジレンマとなったり、職員間で足並みがそろわなかったり、教員の援助できる範囲に限界がありサポート仕切れない現状と、全日制普通科教育困難校での学習は基礎的な内容で十分であり、学習よりも社会へ出てから必要な態度を身につけることが必要とする教員の考え方が明らかになった。

次に筆者がスクールソーシャルワーカーとして働く高校教育現場での調査研究を通して、長期欠席、中退、原級留置の対策として有効な高校の在り方を探った。1 つ目は、千葉県で教育困難校に入試 3 教科、学び直しの導入など特色のある取組を始めた地域連携アクティブスクール 4 校の具体的な取組について報告した。4 校に在籍する生徒のうち、中学校時代に 30 日以上の長期欠席をした経験のある生徒 206 名の 7 割以上が広義の中退をせず、そのうち 7 割以上は長期欠席をくり返していなかった。2 つ目は、4 校のうち筆者が勤務して 5 年目となる A 高校の具体的な取

組を報告し、中学校時代に 30 日以上の長期欠席または別室等登校をした経験をもつ生徒 18 名の進学後から卒業までの状況について元担任および学年主任を対象に面接調査を行った。すると、14 名は卒業し、そのように生徒を高校へ“ひっぱる”（進級、卒業させる）ためには生徒の能力や目標を支える教員のきめ細かな対応が効果的であることが明らかになった。

以上より、高校生が社会から排除される要因として①生徒に「学習の意欲」を求める高校教員、②「学び直し」が必要な生徒、③職業的意義と、福祉的支援のなさが浮かび上がってきた。これらを踏まえ、生徒を高校へ“ひっぱる”ために有効な全日制普通科教育困難校の在り方として、以下３点を目指すことを提言した。

① 福祉的視点を持ったきめ細かな個別指導。

② 知識の「学び直し」ではなく「勤勉性」の習得を目的とした「学び直し」。

③「勤勉性」を身につけた上で社会に出るための「完成教育」。